

[野菜（根菜類）]

4.6 だいこん

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、対抗植物、被覆栽培、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵微生物) (BT剤)	軟腐病 コカガなど	1回 2回
	○対抗植物利用技術	センチュウ	1回
	○被覆栽培技術(防虫網)	コカガなど	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
	○機械除草技術	雑草	2回
	○抵抗性品種栽培技術	萎黄病、ウィルス病	2回
	○光利用技術(シルバーマルチ)	アブラムシ類など	1回
その他の留意事項			

#### 4.7 かぶ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵昆虫・ダニ類) (天敵微生物) (BT剤)	アブラムシ類など	1回
		アブラムシ類、軟腐病	2回
		コカガなど	2回
	○被覆栽培技術(防虫網)	コカガなど	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
	○抵抗性品種栽培技術	根こぶ病	1回
○光利用技術(シルバーマルチ)	アブラムシ類など	1回	
その他の留意事項			

#### 4.8 にんじん

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵微生物) (BT剤)	軟腐病など ヨトウムシなど	1回 2回
	○被覆栽培技術(防虫網)	ヨトウムシなど	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
	○機械除草技術	雑草	2回
	○対抗植物利用技術	ネコブセンチュウ	1回
その他の留意事項			

#### 4.9 ごぼう

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵昆虫・ダニ類) (天敵微生物)	アブラムシ類など うどんこ病など	2回 1回
	○被覆栽培技術(防虫網)	アブラムシ類など	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
	○光利用技術(シルバーマルチ)	アブラムシ類など	1回
その他の留意事項			

50 しょうが

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵昆虫・ダニ類) (天敵微生物)  (BT剤)	アブラムシ類など	1回
		アブラムシ類、ネブセンチュウなど	1回
		オオタバコガなど	1回
	○被覆栽培技術(雨よけ)	根茎腐敗病	1回
	○被覆栽培技術(防虫網)	アワノメイガなど	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
○光利用技術(紫外線カットフィルム)	アブラムシ類など	1回	
その他の留意事項			

### 5 1 れんこん

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (B T剤)	ヨトウムシなど	1回
その他の留意事項			

## 5.2 やまのいも

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (BT剤)	ヨトウシなど	1回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
その他の留意事項			

### 5.3 さといも

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (BT剤) (天敵微生物)	ヨトウムシなど ネコブセンチュウ	1回 2回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
	○対抗植物利用技術	ネコブセンチュウ	1回
その他の留意事項			



#### 5.4 ばれいしょ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵微生物) (BT剤)	軟腐病 ヨトウムシなど	1回 1回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○機械除草技術	雑草	1回
その他の留意事項			

5.5 かんしょ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(側条施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵微生物) (BT剤)	ネコブセンチュウ ヨトウムシなど	2回 3回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○対抗植物利用技術	ネコブセンチュウ	1回
その他の留意事項			

## 5.6 ラディッシュ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、熱消毒、捕虫機により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○土壌診断に基づき有機質肥料を施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術 (天敵昆虫・ダニ類) (天敵微生物) (BT剤)	アブラムシ類など	1回
		アブラムシ類、軟腐病	2回
		アオムシなど	1回
	○被覆栽培技術(防虫網)	マメハモグリバエなど	1回
○熱利用土壌消毒技術	立枯病	1回	
その他の留意事項			